

コメント：氣多雅子（日本学術会議第一部連携会員、京都大学大学院文学研究科教授）

私は、大学における、宗教哲学を担当する一研究者の立場から、コメントさせていただきます。提題の先生方のお話にはたいへん多くの豊かな内容が含まれておりましたが、河野先生が最初に出された問い、「知とは何のためにあるか」という問いが、どなたのお話にも、その根底にあったように思います。文科省が「現代社会の要請に応じた大学改革」を求めていることを受けて、この問いが出されていたと理解されます。先生方のお話において力点の置き方はそれぞれですが、現実の社会の人々のため、人類のために学問があるという主張、哲学系諸学は社会の要請に応じるべきだという主張が共通してあったと思います。それと同時に、「社会に役立つ学問研究」ということを近視眼的な有用性から捉えることに対して、強い批判と危惧の念をお持ちである点も、共通していました。現代の学問が置かれている状況に対する的確な理解に基づいた、これらの基本的な方向について、私も心から共感いたします。

三人の提題者が力点を置かれた論点は、それぞれ非常に興味深いものでした。

河野先生は「知とは何のためにあるか」という問いに「人類（及び地球）の福祉のためにある」と答えられ、「知的探求と教育は、この福利の一部をなす」という観点から、まず、「現代哲学の知は当事者のニーズを要として諸学を連携させるという位置づけをもち、哲学は諸学のリーダーではなくファシリテーターとしての役割を果たすべきである」という主張を展開されました。確かに、哲学はそういう役割を果たすことができるでしょう。しかし、ファシリテーターの役割を果たしうるのは哲学だけではないように思います。河野先生が新しい哲学の役割を開拓し、諸学の境界を破る活動をしておられるのは、すばらしいことだと思います。しかし、いろいろな学問分野を浅くとも広く経験して諸分野を橋渡しすることができるような専門的なコーディネーター、産業界とのパイプももつような専門的なファシリテーターの養成が海外では行なわれていると聞いたことがあります。そういう人たちの養成に哲学が一役買うことがあるにしても、主役になることはないような気がします。また、諸学のファシリテートをする哲学でしたら、「哲学なしで生きられる」という答えが出そうな気がします。もっとも、河野先生は諸学をファシリテートするということだけを、哲学の役割とされたわけではありません。哲学のさらに大きな使命として「社会の再構築」ということを挙げられました。しかし先生が構築されるべきであるとされた「コスモポリタンな社会」は、ハイデガーの言葉を借りれば「故郷喪失」の社会であり、根こぎにされ、世界の内に住み込むことのできない不幸な人間たちを私は思い浮かべてしまいます。また「真理を追求することで民主主義社会を実現するのが哲学の使命である」とおっしゃいましたが、人類の将来が危機的状況にある今日、民主主義にも未来世代の民意を包括することができないという限界があることが指摘されるようになってきました。先生の言われることに私は決して反対するわけではありません。現在の日本の社会においてこういうことを言う必要があるということは確かだと思われまます。ただ、どういう社会を実現すべきかということについてこれまで自明的に通用してきた諸価値が、自明ではなくなっているのではないのでしょうか。

香川先生は、医学教育・医学研究という現場で「知は何のためにあるか」という問いをリアルに問うという役割を哲学はどのように引き受けるべきか、という問題を論じられたように思います。「哲学がもう適応だけに汲々とするのはやめよう」という香川先生の結論は、哲学が現代世界

の学問的課題に応答しようとすることの苦しさ、困難さを如実に表わしているように思われます。

竹村先生は、井上円了の東洋大学建立の例によって、明治期に日本において大学が設立された理念を思い起こさせてくださいました。東洋大学の理念を基礎とした竹村先生の「知は何のためにあるか」という問いへの答えは、「学問は学問のためにある」のだということだと理解いたしました。「学問は学問のためにある」のであり「産業界のためにあるのではない」ということから、「学問の自律性」の重要性を主張されました。学問の自律性という問題は、香川先生が紹介されたタスキギ委員会委員のまったく逆の提案を思い起こさせます。つまり、医学研究の共同体は外部から規制されなければならない、という提案です。両者は問題場面を異にしていますので、学問ないし研究共同体は自律できるとも自律できないとも簡単に言えないだろうと思います。両方ありうるでしょう。この問題の根は、知の探求という根本の問題に関係しているように思われます。

「学問は学問のためにある」ということは、ピロソピア（愛知）という哲学の原義に忠実なものであると言えます。何かに役立たせるために知を求めるのではなく、純粹に知りたいという知的好奇心による探求こそ、哲学の原点であると言えます。そして、『参照基準』の「哲学の定義」にありますように、ピロソピアは元来「知」の全体を対象としたものであり、「学問」そのものを意味していたわけですが、すべての学問を発展させてきたもとにあるのは、ただ知りたいという人間の純粹な欲求であったと言ってよいでしょう。現代科学の研究は直ちに産業化と結びつくとはいえ、科学者たちの研究意欲を掻き立てているのは、競争心や名誉欲・金銭欲ということがよく言われますが、やはりそれ以上に未知の事柄を知るといふことの圧倒的な魅力ではないかと思えます。その意味では、科学者たちもピロソピアと言えるでしょう。しかし、技術と一体となった現代科学という知の探求を無条件に是認することはできないということ、現代の私たちは知っています。たとえば、生命誕生の謎を知りたいという欲求は私たちの純粹な知的好奇心に発するものですが、その知の探求は生命のクローン技術や遺伝子のゲノム編集の技術と地続きのものであると思われます。倫理規定などを策定しても科学者の研究を抑制することが難しいのは、知らないことを知ろうとすることが科学者の本性だからではないでしょうか。そして、そのような科学者の本性の発端にあるのがピロソピアであり、現代において哲学を学ぶ者は、純粹な知の愛求が何を帰結するのか、ということに対して思惟する責任があるように思います。知ることによって世界は変わるのであり、知るとは世界を変えることです。知ることには責任があるということ、さらに言えば、知ることには罪が伴うということ、現代の私たちは知らなければなりません。そして、そのこともまた「知」です。私たちは、知の探求といふことの底に広がる深淵に対して、またそれを「知る」ということによってしか立ち向かうことができないのです。そういう霧を高めた知の探求こそ哲学です。学知を追求する人間の長い営みを担ってきた大学において、哲学は知の探求の行く末を思惟し、知の探求の帰結を如何にして背負うかということを探求するという役割をもつと、私は考えます。

そして、このような霧を高めた知の探求は、ある意味で、科学的な知の探求以上に人類にとって危険なものです。河野先生はパワーポイントで「知は人類（及び地球）の福利のためにある」と書いておられましたが、「人類の福利のため」ということと「地球の福利のため」ということは相反するかもしれません。両者が必ずしも一致しないということ、環境テロの存在が暗示しています。「知は人類の福利のためにある」ということも根拠づけを必要とするということのなかに、知の探求の奥底に口を開けた深淵を見る気がします。ここまで至った知の探求に対して、大学で

哲学する者は責任を負わなければなりません。その責任の故に、哲学は現代の大学のなかに居残らなければなければなりません。たとえ哲学担当者の研究費がゼロになっても、研究室が大学の片隅に追いやられようとも、居残らなければなければならないというのが、私の実感です。

以上、私見を述べることで、コメントとさせていただきます。